

<研究会>5.Cu-Zn superoxide dismutase antisense  
c-DNA導入によるマウス腫瘍細胞の浸潤能および転  
移能の変化(第12回北海道医療大学歯学部口腔外科  
研究会)

著者名(日)	田中 真樹
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	14
号	2
ページ	232
発行年	1995-12-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008095/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008095/</a>

### 3. 北海道医療大学歯学部附属病院緑星の里歯科診療所開設以来4年8か月の診療状況について

○森岡 直美<sup>1)2)</sup>道谷 弘之<sup>1)2)</sup>  
 (北海道医療大学歯学部附属病院緑星の里歯科診療所<sup>1)</sup>)  
 (北海道医療大学歯学部口腔外科学第I講座<sup>2)</sup>)

今回我々は、緑星の里診療所開設以来4年8か月の診療状況について検討を行ったので、その概要を報告した。

この間に、当科診療所を受診した313名の患者のうち、精神薄弱者(児)更生施設の入所者が250名、特別養護老人ホームの入所者が63名、その他が13名であった。

精神薄弱者更正施設の患者の伴っていた障害では、精神発達遅延がほとんどの患者にみられ、その他、てんか

ん、Down症候群、脳性麻痺、自閉症等がみられた。

特別養護老人ホームの患者の合併疾患では、心・血管系疾患が極めて多く、骨・関節疾患、老人性知ほう症等も多く認められた。

治療内容では、口腔外科的治療と補綴的治療が比較的多く、障害に対して治療上配慮を要する事が多かった。

### 4. フローネマルクインプラントの臨床応用とスウェーデン研修

館山 佳季  
 (館山歯科医院)

インプラント治療を行う歯科医にとって、長期的にかつ安定したインプラントを機能的審美的に満足させ維持させることが最大の目的である。そのためには、適応症の選択、高度な外科術式、フィクスチャーの埋入方向や本数、アハットメント選択、高度な上部構造物、咬合、メンテナンス等さまざまな要素を考慮して治療に当たることが成功の鍵となる。現在、最も予知性の高いと言われるフローネマルクシステムインプラントは本年で臨

床応用30年を迎え、その成功率などの報告は他に類を見ないものになっている。

今回我々はフローネマルクインプラントの教例を経験したので若干の考察を加え報告した。また、本年3月より約1ヵ月スウェーデンのイエテホリ近郊のHalmstad Hospitalにて、Oral and Maxillofacial surgeryの研修に参加したのでその概要を報告した。

### 5. Cu-Zn superoxide dismutase antisense c-DNA導入によるマウス腫瘍細胞の浸潤能および転移能の変化

田中 真樹  
 (北海道医療大学歯学部口腔外科第I講座)

癌病巣に浸潤してくる好中球やマイクロファージから産生される活性酵素は、その局所高濃度に存在した場合は癌細胞にたいして殺細胞効果を示すが、それ以下の低濃度ではかえって癌細胞の浸潤・転移能が増強する。一方、活性酵素の消去酵素の一つであるCu-Zn superoxide dismutase (SOD) を用いることにより浸潤・転移抑

制が認められる。そこで、SDOが癌細胞の浸潤・転移能を規定する因子の一つであることを想定し、マウス線維肉腫細胞(Meth A)由来の低転移株(ML-01)と高転移株(ML-02)の細胞内Cu-Zn SOD活性が高いことから、ML-01へCu-Zn SOD antisense c-DNAを導入した結果、腫瘍細胞の浸潤と肺転移能が増進した。